

地誌学的思考と地誌学の可能性

堀 信 行*

Geographical Way of Thinking on Place and Rejuvenation of Regional Geography

Nobuyuki HORI*

目 次

- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| I. はじめに：地誌学の現在 | II. 個人的体験からみた地域研究へのまなざし |
| 1. New geography の台頭と地誌学の退潮現象 | 1. 沖縄・奄美で知ったlocal knowledge の世界 |
| 2. 変化する世界，揺れる民族的・文化的アイデンティティ | 2. アフリカの地域研究を通じて消えぬ自問 |
| | III. 地誌学的思考の重要性 |
| | IV. 地誌学の再生に向けて |

I. はじめに：地誌学の現在

1. New geography の台頭と地誌学の退潮現象

New geography の台頭が著しかった1960年代の地理学の潮流には，地理学の全体像を揺さぶるような強い求心的なベクトルがあった。しかし，地理学の現状は，そのころとはかなり異なった発散的なベクトルをもった再編期に入っているようにみえる。

地理学のこうした変貌の中で，一つの顕著な兆候は地誌学の退潮である。地誌学の退潮現象は，計量革命という表現に象徴される New geography の台頭に伴う裏返しの現象でもあった。しかし，その一方で，社会学をはじめ，文化人類学や民族学や民俗学といった文化諸科学の隆盛があった。地誌学の退潮の兆候は，見方を変えればさらに時代を遡って認められることでもあろう。現在，大学の地理教育のカリキュラムにおいて地誌学の存在理由が，教職免許取得の必須科目の一つになっているからだといっても過言ではないだろう。

地誌学の退潮現象という現状認識が妥当であるならば，その現象はどのように説明され

*東京都立大学理学部 ; Faculty of Science, Tokyo Metropolitan University

るのであろうか。例えば、地誌学が地理学の中で担ってきた機能が消滅したためであろうか。それとも、地誌学が他の分野に取って代わられたためであろうか。あるいは、地誌学が何らかの理由で無視されたり、過小評価されているためであろうか。地理学における地誌学の現状認識に対する説明は、さまざまな立場から多くの意見がある。

本稿では、まず筆者が1978年から1985年までかかわった日本地理学会のサンゴ礁地域研究グループ・作業グループで古今書院から、日本のサンゴ礁地域の地誌学の本として、1990年に出版した『熱い自然：サンゴ礁の環境誌』と1992年に出版した『熱い心の島：サンゴ礁の風土誌』の責任編集をしたときに考えたことを述べる。また、筆者が、1969年以降一貫して関わってきたアフリカでの地域研究の経験をおもな素材にして、地誌学の再生を強調する立場から、地誌学的思考の重要性と地誌学の可能性を論じてみたい。

地理学的見方や考え方は、いろいろな機会に話題となり論じられている。しかしこれらの議論や論考の中で、筆者が物足りなさを感じてきたことは、「地誌学的思考」の不足であったり、それが無視されたり、過小評価されてきた点にある。地誌学的思考は、地理学が志向する一つの側面である地理的空間の法則定立的な立場からすれば、その対極にある思考にみえるかも知れない。しかし、それは違う。ここでいう地誌学的思考はその対極の理論的思考を否定するものではない。むしろ両者は、相互に不可欠の補完的な思考であることを強調しておきたい。

地誌学的世界は、「場所」(place)を離れて成り立たない。地誌学的思考で重要なことは、その場所に関わる生態的環境全体の空間的現象の理解を志向するとともに、その場所(地域)に関わる人間が持っている文化、換言すれば世界観を捨象しないで場所の全体像を認識しようとする思考であろう。本稿ではこうした地誌学の再生について、筆者のこれまでの研究の成果を踏まえて模索してみたい。

2. 変化する世界、揺れる民族的・文化的アイデンティティ

現在、われわれは、地球環境問題に象徴されるように地球全体が切り離せない一つの「系(システム)」であるという地球観をもち、それを明確に自覚することが求められている。その一方で、世界各地から飛び込んでくる情報は、民族の自立の確立であり、地域の復権に関わる諸現象に関することが多い。現代のわれわれは、「地球人」としての自覚をもつ一方で、民族的・文化的アイデンティティとか、地域や場所へのこだわりを自覚し、それに覚醒する様相を呈している。

ただ、こうした「われわれ意識」は、民族の歴史を掘り起こし、現秩序との歪みを回復する自意識を育み、強化している。多発する地域紛争や民族問題は、「われわれ意識」の

発生と消滅により、つねに生起するものであろう。「われわれ意識」の発生は、しばしば、アフリカなどを見ていると、近代的な国家建設という過程で、意識的に醸成されている。

アフリカでは、植民地支配下に刻印された国境線は、同一民族の分布領域を分断し、異質な民族を結果として一つの国家という空間内に囲い込み、固定してしまった。植民地支配をする宗主国の戦略でひとまとまりにされた国家は、その土地に住む民族集団の歴史過程とは程遠いものであった。この歴史的な傷を負ったまま国家建設に立ち向かう矛盾が、アフリカの各地で見られる。植民地支配に見る領土分割は極端な例にしても、民族間の分布を凝視したとき、民族と分布する場所との間には、単純な一致は見いだせない。このことは、世界の至るところで普遍的に見られる現実でもあろう。

したがって、場所と場所性、民族と民族性とは微妙に意味内容の位相が異なってくる。地誌学的思考とは、その意味でア prioriに「その地域に住む人々」と場所の特性を重ね合わせず思考することでもある。場所と場所性、民族と民族性の位相のずれを意識しながら、新たな風土論や景観論が展開されたとき、新たな展望が拓かれよう。そして、本稿が志向する地誌学の再生や可能性ともつながっていくことである。いずれにせよ、現在われわれが直面している状況は、地誌学が再生すべき時代を迎えたことを物語っている。

II. 個人的体験からみた地域研究へのまなざし

本稿で志向する地誌学を支えているものは、地誌学的思考である。地誌学的思考とは、地理学的思考と言い直してもよいが、場所への理解、自然生態的な環境と社会文化を背景とする人間との総合性を強く意識した思考を強調するために、あえて地誌学的思考とっておきたい。

地誌学の再生、新たな地誌学の可能性を考える糸口として、筆者がこれまでに行ったさやかな研究を引きながら地誌学的思考について若干の考察を試みたい。

1. 沖縄・奄美で知った local knowledge の世界

かつて筆者は、サンゴ礁地域研究の一環として、サンゴ礁地形に付与された方言名称の考察から、住民の環境認識の特性や生態的認識の深みについて述べたことがある（堀，1979，1980）。図1は、そのときに住民の民族分類を考えるフレームワークを示したものである。この図は、いささか複雑な図でわかりにくいですが、民族分類を通して住民の民族知識の深層を考えるためのものである。図1は、地誌学的思考の内部構造の一部を具体的に示すものである。

この民族分類に関する研究は、サンゴ礁地形の野外調査を進める中で、住民の使用する

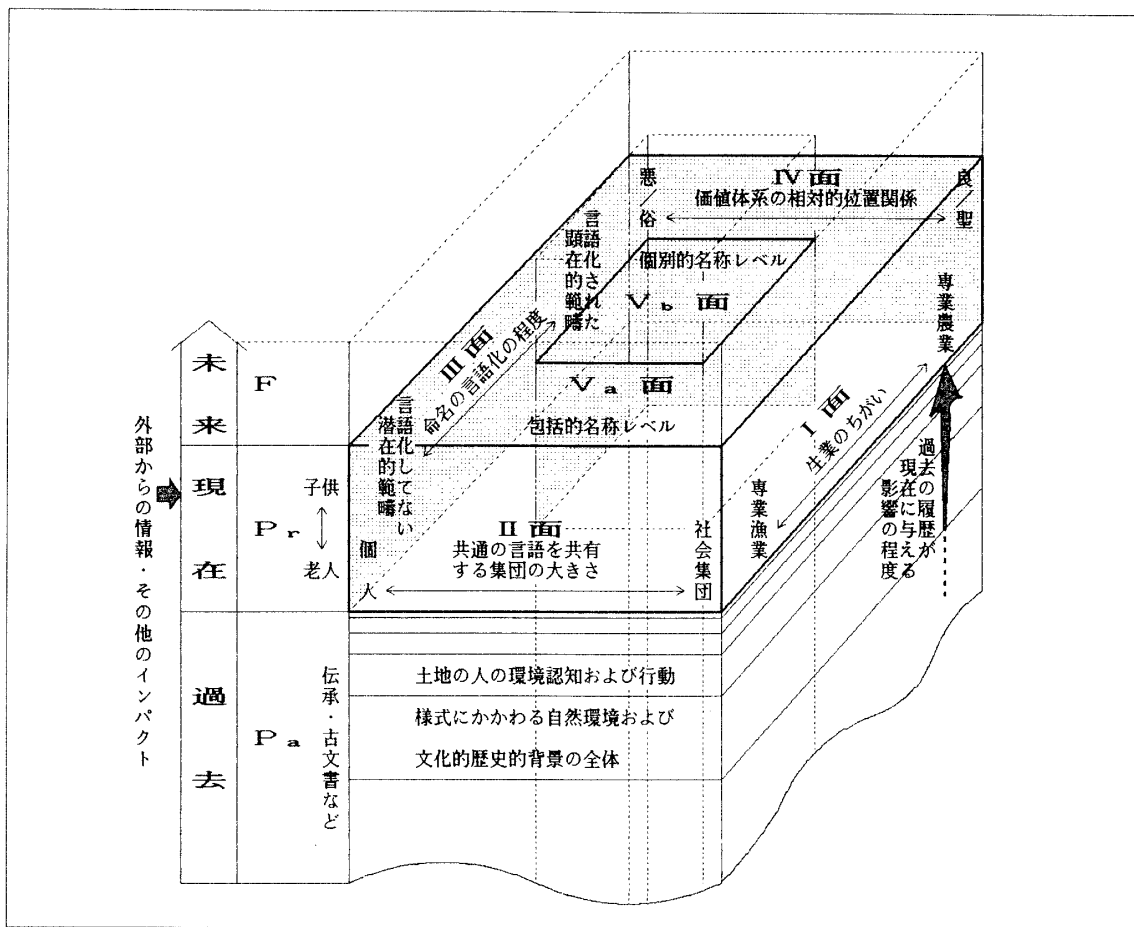


図1 民族分類の研究に求められる通時的・共時的な見方の諸関係を示す概念図
(堀, 1979, 1980の一部を改変)

伝統的なまとまりをもつ地域社会を「現在」の断面でもみても、世代差のある構成員が絶えず外部からの諸影響を受けつつ一つの方言体系を形成維持している。図においてI面は話者の立場の違い、II面は言語が社会的に機能する程度、III面は言語的な成熟度、IV面は話者の持つ価値体系の中における環境の構成要素の相対的な距離関係あるいは親しみの程度の差、V面は分類されたものの包摂関係を示す。

方言名称を知る必要があり、それらを収集することから生まれた。この研究によって、住民が、島の中のサンゴ礁の微地形構成や、それぞれの性質について実に詳しい彼ら固有の民族知識、いわゆる local knowledge をもち、彼ら自身の自然観や世界観を背景とした環境認識を持っていることを知らされた。人間が、自然（環境世界）をどのように見ているかを考えるきっかけとなった。一つの地域の生活用語を理解するためには、図1のI～V面の事項について思考する必要があると考えられる。

また、沖縄や奄美のサンゴ礁地域の人々の土や石のイメージから、自然観を育んだ世界観を示したものが、図2である（堀, 1992）。この研究も上述のサンゴ礁地形研究の過程で蓄積されたものである。沖縄や奄美の人たちの土や石のイメージを知ることは、筆者自身の地域理解の糸口となった。図2は、筆者自身が収集した多くの土や石に関する方言名

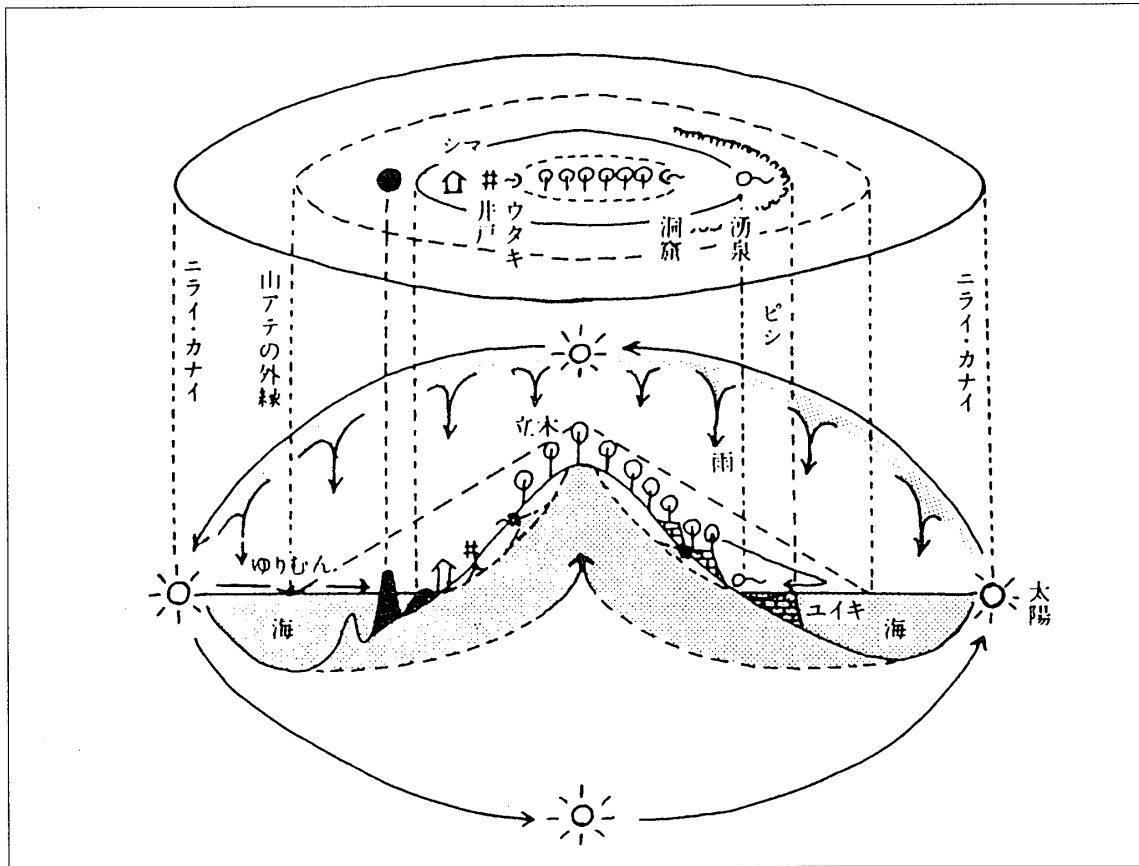


図2 土と石のイメージがはぐくまれるニライ・カナイをめぐる世界観 (堀, 1992)

シマ (集落) を核に広がる山タテ (船位決定) 可能な漁労空間。水平 (海と陸) にも垂直 (天と地) にも広大な空間を循環する「ゆりむん」の水。海中から突き出る立神。それと相似関係にある島。そして大地から生える立木。いずれも水の精気を吸い上げて命あるものになる。循環する水の出入り口 (洞窟・湧泉・井戸), あるいは発地 (沖・奥・天) と着地 (岸边・御嶽) は霊力の集中する場所。水 (命) の循環を断ち切るまいとする意志と願望がこの認識を再生する。かくして水の浸潤で生気を帯びた土と石はさらなる命を育み, 保障し, 再生する。

称, あるいは民話などの分析から理解される沖縄・奄美地域の人々の世界観を示した概念図である。この図は, 地域研究が行なわれる過程で示され続ける地誌学的な思考の図的表現の一つとして考えておきたい。

本稿には, 個々の図の内容を詳しく解説する紙幅はないが, 図に付けた説明でうかがい知れると思う。こうした図を示そうとする意図には, 地域理解を土地の人々の自然観を支える世界観にまで迫って理解をすることによって, 自然と人間の相互関係ができるからである。

このような論点は, 従来の地理学では積極的に主張してこなかった。むしろこうした部分に触れないことが「科学的」思考を探究する地理学的美徳とされてきた。地理学が, こうした分野への介入を避けてきた禁欲さを一方で評価しつつも, 筆者はあえて本稿でいう

地誌学的思考の一部として世界観に関わる研究の重要性を強調しておきたい。

2. アフリカの地域研究を通じて消えぬ自問

筆者が1969年にアフリカ研究をはじめてから久しい。広いアフリカの大地に立つてつねに自問したことは、「なぜ人間は移動してやまないのか」、「なぜ人間はそこに住むのか」、「どのようにして牧畜や農業といった生業は決まるのであろうか」、「どのようにしてアイデンティティ、すなわち「われわれ」意識が生まれ、維持されているのだろうか」などといったことであった。こうした自問は、アフリカという場所を理解するためには避けられ

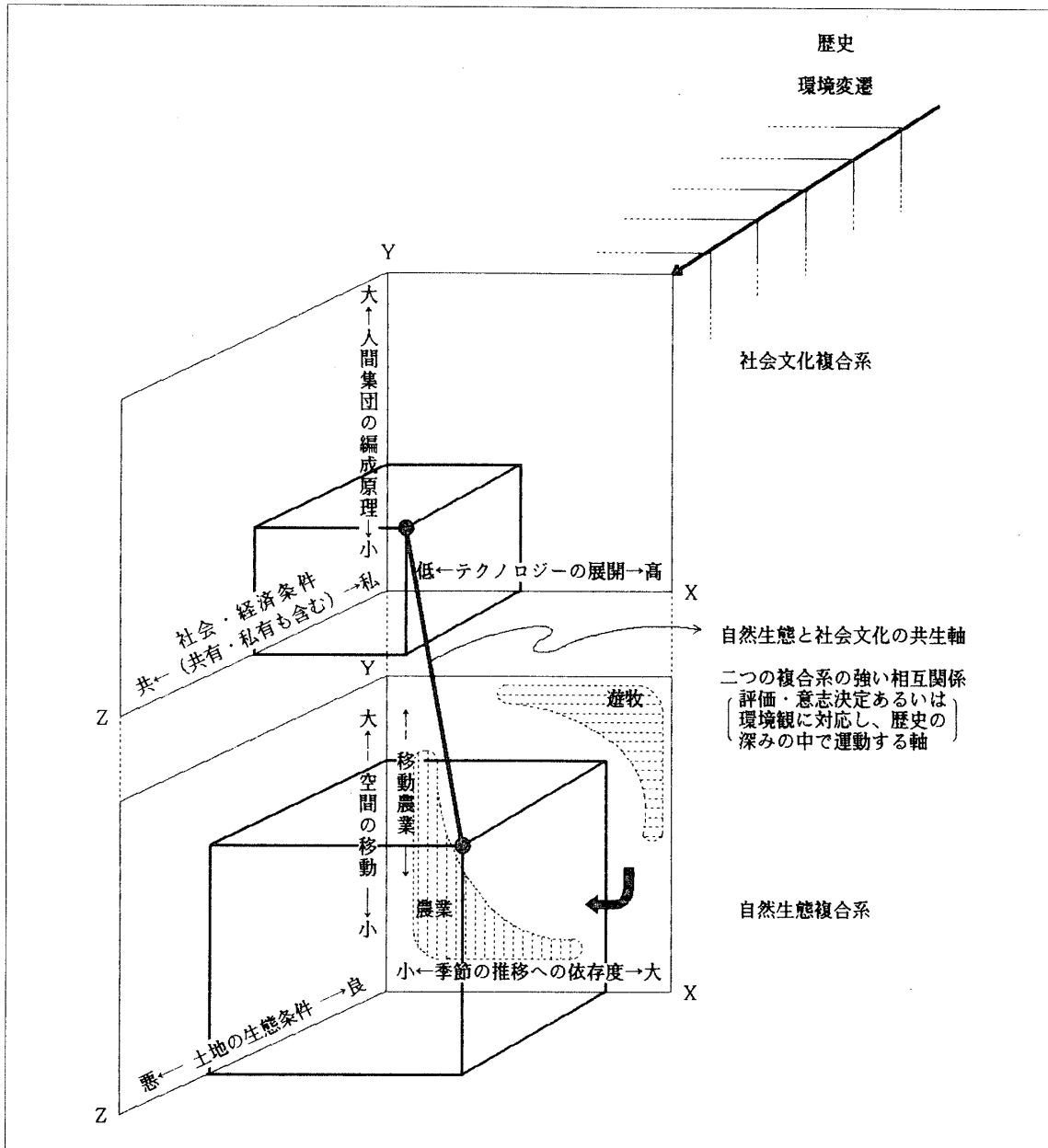


図3 自然生態と社会文化の両複合系の共生関係から生活様式が成立する説明モデル (堀, 1987)

ないものに思えた。これらの自問は、今もなお消えず、むしろ筆者の心の中で増幅されている。

これらの自問の中で、牧畜と農業については、図3のようなことを考えたことがある(堀, 1987)。三次元のグラフで、複雑な表現であるが、生活様式の成立を考える地誌学的な思考の枠組みを示したものである。図3に示されるように、少なくとも一つの生業の成立には、自然生態的な条件と社会文化的な条件が関係していることは間違いないであろう。図中では、前者の座標軸を自然生態複合系とし、後者の座標軸を社会文化複合系とした。この両複合系の座標を相互に結びつける「自然生態と社会文化の共生軸」が想定されよう。

この共生軸は、歴史的に、あるいは環境の変遷とともに、場所ごとに運動すると考えられる。ということは、農業と牧畜という生業自体、ともすれば置き変わることもありえると考えられる。図としては表現されていないが、おそらく、この共生軸自体が、場所性を育む民族集団の共有する世界観を構成するもう一つの複合系の座標の中の交点と結びついて、共生軸の三角形ができると考えられる。社会文化複合系と自然生態複合系の交点を結ぶ共有軸、さらに、世界観を構成する複合系の交点を結ぶ三角形の共有軸は、時間(歴史)とともに変化し続けると考えられる。この図のような思考の枠組みは、本稿の地誌学的思考の一部をなすものである。

III. 地誌学的思考の重要性

地誌(学)的思考の特性

すでに述べたように地誌学的世界は、「場所」を離れて成り立たない。場所(place)とは、ダーウィンの『種の起源』の中で論じられた「複雑な関係の網」(a web of complex relation)で結びつけられたものである(野間ほか, 1974)。さらにここでいう場所は、社会や文化や精神をもった人間と「複雑な関係の網」で結びつけられた場所である。地誌学的思考とは、その場所に関わる生態的環境全体の空間的現象の理解を志向するとともに、その場所(地域)に関わる人間が持っている文化、換言すれば世界観を捨象しないで場所の全体像を認識しようとする思考であろう。

さらに人間はさまざまな要因で場所を移動してやまない。移動するとともに場所のもつ場所性は失われる。この状態をレルフは、「没場所性」(placelessness)と表現した(Relph, 1976)。さらにたとえば加藤(1992)は、没場所性の人間にとっての意味に着目する立場から「没場所化」に注目することの重要性を指摘し、それを「風景化」と表現した。場所の意味、場所性が発源、あるいは回復する深い意味を問う地誌学的思考が重要

であろう。

民族学の成果であるが、例えば、中央マダガスカルの北東部にすむシハナカ族の民族意識を研究した森山(1992)は、移住してきた他民族が、シハナカに帰属して「シハナカ化」が進む過程で、「場所」が果たす役割の重要性を指摘している。この研究の視点は、先述の問題意識につながるものであろう。

地誌学は、場所と人間の結合関係の深層を読み取り、場所性を内包した場所のもつ、重層のかつ多義的、動態的な側面を活写するものでありたい。あるいは地誌学は、「場所(地域)」を場所たらしめる自然生態と社会文化の相互関係が場所に関わる人の顔が見え、人の心が感知されるように説明される、場所に関する研究でありたい。

そのために欠かせない地誌学的思考の四項目について、先述の本『熱い心の島』の座談会の中で述べたことがある(斉藤ほか, 1992, pp.294-295)。少々長くなるが、町並み保存との関連で筆者が述べた箇所を以下に引用してみよう。

……つまり、景観にせよ、「文化的な何々」を問題にする場合に、「文化」とはいったい何でしょうか。文化人類学では、「文化」とは一つのまとまりをもって共有されている「知の大系」であるという言い方があります。それを一応認めましょう。しかし、私は地理屋ですから、地理屋としてこれをもう少し言い足したくなります。一つの語呂合わせになってしまうのですが、「知の体系」は、もっといろいろな意味をもった「チの体系」だといいたいです。いろんなといっても四つですが……。

まず一つ目は、何よりも地表面の「地の体系」です。これは地理的な「空間の体系」でもあります。空間と一つのセットをなして「知の体系」が存在しなければ、地理的な文化とはなりません。

二つ目は、人間がいなければなりません。人間の存在や社会は、血液に代表されましょう。つまり、「血の体系」です。これがないと、人間の存在も、さまざまな社会関係も成り立ちません。こういうものが常にあればこそ、町並みを見れば、その土地、その地域ならではの人間関係があったことが歩きながら感知できるし、実感できると思うのです。風景のなかに、私たちは生活をしている人間を、さらには人間の社会関係を見ているわけです。

三つ目は、先ほどの「知の体系」です。人間が、さまざまな関係の集団として共有し、生活を通して歴史的に蓄積してきた「認識の体系」です。

四つ目は、地理学が長い間タブーにして避けてきた精神的世界、あるいは宗教的世界のことで、世界観とかコスモロジーともいわれるものです。人間が上述の「チの体系」の一つのものとして繋ぎとめ、あるいは消化をし、分泌もすることができるのは、この精神的

な体系を文化として育んできたからです。精神的、宗教的世界に関わる霊力や靈魂の霊という字は、チとも読めます。そこで、これを「霊の体系」ということにします。

当然のことながら、今まで述べた「チ（知＝地＝血）の体系」と「霊の体系」とは、一体のものとなっていなければなりません。そうでなければ、人間としても社会としても分裂してしまい、生活が成り立ちません。一つの文化を背景にした現実の生活は、以上四つの「チ（地＝血＝知＝霊）の体系」が一体となり、と同時に変貌を遂げながら、歴史の中をうねってきたのだらうと思うのです。そして、これからもそうだろうと……。

だから、「町並みなんて、単なるモノに過ぎない」という人は、文化というものがもっている、もっと本質的な部分に触れていないのです。その家や町並みを動かしたのでは、場所の意味が失われます。その場所があればこそ、意味があるわけです。動かし難く、その場所に……。これが地理屋のこだわる、ユニークネス（唯一）な「場所性」であり、人間の生活が刻印され、伝承される「場所の記憶」です。

以上、四つの「チ（地＝血＝知＝霊）の体系」の内容は、このままで理解されると思うが、若干の補足説明をしておきたい。まず、「地」の体系については、地理的な空間の体系であり、地理学がこれまで深く関わってきた地域・場所、あるいはトポスである。他には、国家とか、領域とか、境界など空間の諸相に関するものである。

「血」の体系は、例えば図3に示された遊牧と農業といった生業の違いに見るように、場所に関わる人間の結合関係、社会集団の編成様式である。例えば、家族、イエ（家）、族、祖先など、文字通り「人と人之間」としての「人間」が理解されねばならない。生業と強く結び付く社会集団内、および集団間の関係は、重要である。

「知」の体系は、認識の体系である。これは、生活の中で育まれた local knowledge に強い関心を向ける地誌学的思考によって引き出されるものである。地誌的場所は、阿部（1990）の表現を借りれば、意味を了解する暗黙の前提となっている枠組み、「意味母体（ミーニング・マトリックス）」を共有する範囲を一つの世界とする。知の体系は、この意味母体でもある。この意味世界の外部、すなわち意味付けされない領域をベルク（1988）によれば、「自然」ということになる。これを場所をめぐる他我問題に置き換えれば、「他」の認識となる。かくして自然も他我問題の一つとなり、つねに政治性を帯びたものとなる。

「霊」の体系は、図2に示したような世界観（コスモロジー）の問題でもある。「場所」に関わる人間の価値観が、環境観や自然観と結び付いて「場所性」を濃厚なものにしている。その点でこれまで示してきた「地」・「知」・「血」の体系の三つを包み込み、一種の入れ子構造になっている体系である。

IV. 地誌学の再生に向けて

地誌学的世界は、「場所」を離れて成り立たない。地誌学的思考で重要なことは、その場所に関わる環境全体の空間的現象の理解を志向するとともに、その場所（地域）に関わる人間が持っている文化、換言すれば世界観を捨象しないで地誌学的世界を認識しようとする思考であろう。なお、本稿では、地域研究と地誌学とは、多少意識して用語を使い分けた。どんな分野であれ特定の地域（場所）に関わるものは地域研究とし、地域（場所）の全体像を得ようとする意図が強く働いているものは地誌学と考えた。しかし、両者の境界は限りなくあいまいである。

筆者は、地域ごとの自然生態的な特性と人間の生活との有機的結合を示す場所性や地域性を生き生きと描く地誌、あるいは「場所に関わる人の顔が見える地域像を活写する地誌学」を確立するために欠かせない地誌学的思考を支える四つの体系を指摘した。それは、地誌を「チ四（四つのチ）」と文字った四つのチ（地＝知＝血＝霊）である。これを踏まえて、本稿では、日本のサンゴ礁地域である奄美や沖縄（図1、図2）、あるいはアフリカで展開してきた現地調査の成果（図3）から、地誌学的思考につながる思考の枠組みのささやかな例を示した。

地誌学が、対象とする「場所」や「地域」の「チ（地＝知＝血＝霊）誌」について、相互の結合関係を見失わないで総合的思考を模索し続ける地誌学的思考は、現代こそ再認識されるべきである。世界各地で頻発する地域紛争、民族対立、あるいは見直される地域文化、地方の復権等といった現代社会の諸相は、地誌学の再生を促すものである。世界各地で日夜展開している人間の「没場所化」は、新たな場所と場所性を生む契機となり、変化してやまない地誌的「場所」のダイナミズムがあぶり出されている。人間のいる場所性を秘めた場所の全体性を切り捨てない地誌学は、荒削りでもこれまで以上にその可能性を模索し、再生に向けて見直されるべきであろう。

文 献

- 阿部 一（1990）：景観・場所・物語－現象学的景観研究に向けての試論。地理学評論，第63巻，pp.453-465.
- 加藤典洋（1992）：「風景」以後。現代思想，第20巻第9号，pp.182-191.
- 斎藤 毅・堀 信行・長谷川 均・中井達郎・安陪麻子・渡久地 健（1992）：サンゴ礁地域の風景をめぐって。サンゴ礁地域研究グループ編：『熱い心の島－サンゴ礁の風土誌』（日本のサンゴ礁地域2）古今書院，pp.269-296.
- 野間三郎・門村 浩・中村和郎・野澤秀樹・堀 信行（1974）：「地域システム」に関する諸外国の研究－その展望(1)。地学雑誌，第83巻第1号，pp.19-37.
- 野間三郎・門村 浩・中村和郎・野澤秀樹・堀 信行（1974）：「地域システム」に関する諸外国の研究

堀 信行：地誌学的思考と地誌学の可能性

- その展望(2). 地学雑誌, 第83巻第2号, pp.103-124.
- ベルク, A., 篠田勝英訳 (1988) : 『風土の日本—自然と文化の通態』筑摩書房, 133p.
- 堀 信行 (1979) : 奄美諸島における現成サンゴ礁の微地形構成と民族分類. 第33回九学会連合大会予稿集, pp.15-16.
- 堀 信行 (1980) : 奄美諸島における現成サンゴ礁の微地形構成と民族分類. 人類科学, 第32集, pp.187-224.
- 堀 信行 (1987) : 環境変遷と土地利用. 海外学術調査に関する総合調査研究班編: 『海外学術調査コロキアム「乾燥・半乾燥地帯の農業—その伝統と変容」記録』, pp.177-195.
- 堀 信行 (1992) : 土のイメージ・石のイメージ—方名・地名・物語にみる自然とひととの交流. サンゴ礁地域研究グループ編: 『熱い心の島—サンゴ礁の風土誌』(日本のサンゴ礁地域2) 古今書院, pp.31-47.
- 森山 工 (1992) : 民族の場所—中央マダガスカル北東部, シハナカ族における民族意識. 民族学研究, 第57巻第2号, pp.121-148.
- Relph, E. (1976): *Place and Placelessness*. Pion, London, 156p.